

# くすり博物館だより

VOL. 47

平成14年(2002)4月

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY



内藤記念くすり博物館  
〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町竹早町1  
Tel:058689-2101 Fax:058689-2197  
http://www.eisai.co.jp/museum/

特別展 <sup>はり</sup>鍼のひびき <sup>きゅう</sup>灸のぬくもり —<sup>いや</sup>癒しの歴史— 2002年4月27日～11月24日

## テーマ特集◆絵図の中の<sup>しんきゅう</sup>鍼灸

傷を負ったり、痛みを覚えた時には、とっさにその部位に手をおしつけたり、もんだりして、傷や痛みをなんとかしようとした経験は、誰にでもあるかと思います。まだ医薬が発達していなかった古代には、泥を塗ったり、木の葉を張ったりしたことでしょう。このように傷や病気の個所になんらかの刺激を与えると症状がよくなった経験が、やがて理論化され、鍼灸学として伝えられてきました。

鍼や灸によってあるツボを刺激すると、その刺激が<sup>けいらく</sup>経絡を伝わって、症状が緩和されたりなくなったりします。この仕組みは、刺激によって脳内物質が誘発されるので、内なる薬とも呼ばれています。現代の医学では解明できない部分もあるため、非科学的な経験による治療手段だとされている面もありますが、科学的検証が試みられ、今日では鍼麻酔や予防医学という観点からも、見直されています。また最近では、自分で身体のツボを刺激して健康管理に役立っている方も多くなりました。

そこで、くすり博物館では鍼灸の歴史をご紹介する企画展を開催することにいたしました。ツボを学ぶために使われた経絡人形や経絡図、鍼灸書、治療に用いた道具などの資料を通して、ご自身の健康と共に鍼灸学を見つめ直すきっかけとなりましたら幸いです。



灸艾図 宋代・李唐原画 78.4×65.9

(近代の模写)

川岸の家の門前で、弟子を連れて医者(醫師)が患者の背中に灸をすえています。家族たちは熱さに絶叫する患者の両手を押さえつけながら、とても不安そうにあるいは興味深そうに、医師の一举手一投足をかたずを飲んで見守っています。弟子は、灸をすえたあとに塗る膏薬の準備をしているようです。医師は鈴を鳴らしながら街や村を往診して回ったので、当時は「鈴医」と呼ばれていました。原画を描いた李唐は、建炎年間(1127～30)の画家です。

## 鍼灸のはじまり

古代中国では、物事の根元に「気」というエネルギーの法則があると考えられ、人間の生命現象もこの法則にあてはめて説明されていました。そのため中国の医学は、「気」の流れる経路を介して、「外から治す」鍼灸と、「内から治す」漢方医学を二つの柱として発展してきました。

よく使われる表現に「薬石効なく」という言葉がありますが、これは「さまざまな薬と治療方法の効果がなく」という意味で、この「石」は古代の石製の鍼をさしています。ここからも鍼が古くから重要視されてきたことがわかります。

紀元前2世紀の遺跡、河南省・<sup>まおうたい</sup>馬王堆三号漢墓からは、副葬品の中に帛書(絹に書かれた本)が発見されました。これには、11本の経絡を特定の病気にあてはめた灸治療について書かれていました。また、同じ時代の湖北省の張家山漢墓からも「脈書」と呼ばれる竹簡(竹の短冊にかかれた本)が出土しています。およそ、2100年前には、経絡のルートおよび経絡と病気の関係がだいたい明らかにされたことがわかります。

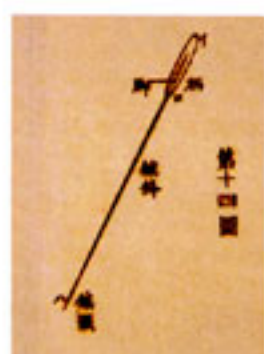
## 火鍼

「和漢三才図説」第15巻(寺島良安著 1713年初刊)より



## 明代の九鍼(右より毫鍼・長鍼・火鍼、員利鍼・鏃鍼など)

「古今医統大全」(徐春甫 1557年原刊・1660年和刻)より



毫鍼の各部の名称  
「鍼学新論」卷之1  
(佐藤利信1887年活版)より



( )内は資料のサイズ。単位はcm。

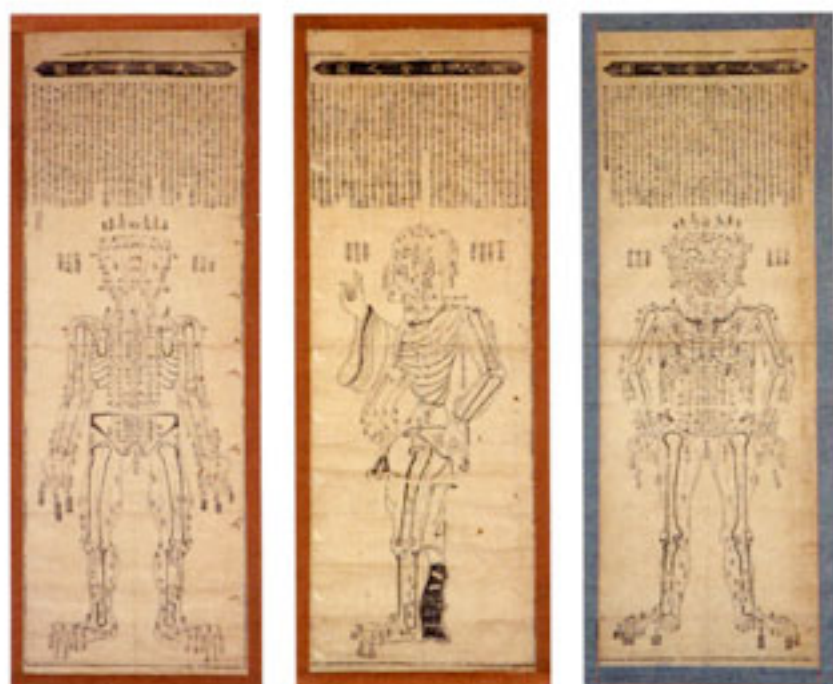
経穴を探して

中国では1世紀初めの後漢代に、経穴の位置や効能、鍼灸の仕方や禁忌が「黄帝明堂経」という書物にまとめられました。当時の医師たちは天体の運行や気象の変化が人体に影響をもたらすと考え、皇帝が天文暦法や気象観測に基づいて祭礼を行う建物「明堂」になぞらえて、経絡の描かれた人体図を「明堂図」と呼びました。

唐の孫思邈(581-682)は、鍼灸による救急処置には明堂図が欠かせないとして、図の大きさを等身大の半分とし、経絡の塗り分け方を決めました。その画法は後世の規範となりました。また、北宋代に経絡・経穴を表わした等身大の銅像、すなわち銅人が王惟一によって鑄造されたといわれます。そのため、明堂図は銅人図ということもあります。

経絡人形(銅人形) 紙製 ▶

元禄5年(1692) 65×20×11  
この銅人形は元禄5年(1692)製で、明治36年(1903)まで筑紫流按腹の笹亦家に200年以上受け継がれてきたものです。



経絡図(仰人明堂之図・伏人明堂之図・側人明堂之図)

寧波府板行(1550)の4幅対を江戸時代に修正を加えて印刷したものです。寛文版 3図

鍼を打つ

鍼治療

鍼灸の治療は、中国から日本へ漢方医学とともに伝わりました。古代日本では、朝廷の役職に鍼博士があり、平安時代の丹波康頼(912-995)が有名です。彼は永観2年(984)に「医心方」全30巻を朝廷へ献上しました。この書籍は遣隋使・遣唐使たちが持ち帰った貴重な鍼灸医薬書・房中神仙書を編集したもので、当時の治療方法を知る上で大変貴重なものです。

鍼は、金属製の細い針を経穴にさして治療を行います。日本では戦国時代から江戸時代にかけて、いくつも鍼の流派が現われました。当時は鍼専門の医師を、鍼師・鍼立・鍼家・鍼科などと呼んでいました。

流派ごとに得意とする鍼の刺し方があり、使用する鍼の材質や形状も異なりました。日本では中国と異なり、木や象牙の小さな槌、竹や真鍮の細い管を補助具として使うようになりました。補助具なしの刺し方を撚鍼法、槌を使うのを打鍼法、管を用いるのを管鍼法と呼び、現代の日本では管鍼法が主流です。ただし、鍼灸の教科書は流派の壁を越えて、この刺鍼3法を並記しました。



「医心方」巻第22(妊婦脈図) 彩色模写 小島宝素(1797-1848)旧蔵

巻第22の婦人部(産婦人科)第1篇の妊婦脈図月禁法には、妊娠十ヶ月間の胎児と経脈の関係が月ごとに描かれ、その経脈への鍼灸治療を戒めています。



針摺「人倫調蒙図彙」より

江戸時代、毫鍼のような刺す鍼の製作は、針摺という専門の職人が引き受けていました。鍼灸の流派によって、鍼の材質、柄の巻き方、鍼先の研ぎ方などが微妙に異なっていたといわれます。



銅人形師「人倫調蒙図彙」より

模型によって経絡を学ぶことが盛んに行われると、「銅人形師」と呼ばれる専門の職人が現われました。

技術の向上のために

日本では、鍼の上達のためにいろいろな訓練が考えられました。杉山流には、水に浮かべた切り瓜を沈めないように刺す「浮きもの通し」、桐などの木の板を刺し貫く「堅もの通し」、寝ている猫を驚かさぬように刺す「生きもの通し」がありました。坂井流では、いり糠を竹筒に詰めて絹でふたをしたもので訓練しました。現在では、綿を固く詰めた鍼枕や、皮膚や筋肉と同じ弾性のシリコンを重ね合わせた練習台を使っています。



訓練の様子「鍼術秘要」(上之巻 坂井豊作原本・中村謙作訳述 慶応1年(1865)刊)より



## 灸治療

灸は、艾を肌の経穴の上に乗せて火をつけ、焼いた時の熱気によって経穴を刺激し、「気」を整える治療方法です。鍼灸師に施してもらうだけでなく、各自で家庭や旅先で灸をすえることも行われました。やがて、釜屋・亀屋といった艾の専門店ができ、行商人も艾を販売するようになりました。「灸をすえる」という言葉には「いさめる」という意味がありますが、一度灸を施されると、その熱さが忘れられず、またよく効いたため、このようにいわれたのでしょう。

◀ (左上) あつさう 明治21年 芳年画 網島亀吉印刷出版 37.4×25.7

絵の女性は、着物を前後逆に着て背中を出し、木箱にうずくまるようにして、灸の熱さをこらえており、いかにも「熱そう」な姿です。艾は紙で巻いた切艾を使っています。灸をすえた4ヶ所のツボの周囲が赤くなっています。今すえている途中の左下のツボもすでに赤くなっているため、1ヶ所にいくつか続けてすえていたことがわかります。

灸は1回ではなく、3回連続ですえました。最初、「ああ痛い、皮切り三火は、押さえて貰いてえ」と川柳に詠まれたように、灸をすえた後、経穴の周りを指の先や竹の筒などで圧迫すると熱さは和らぎます。一番熱さを感じる皮膚の表面がつぶれた後、「皮切り三本応えたら もう痛くもない」状態になったら、更に病気に応じた数だけすえました。

◀ (左中) 開花人情鏡 焼灸 明治11年 豊原国周筆 長谷川一嶺記 36.0×23.7

机に頬づえをついて手ぬぐいをかみしめ、灸をすえてもらっています。灸痕（水ぶくれ）を潰さないように、艾の灰は鳥の羽でそっと払いました。我慢できない時にも、素早く払いのけたのでしょうか、背中の艾から立ち上る煙のそばに羽が描かれています。

▶ (左下) 御用十二手箱ノ内 硯箱 香蝶桜園貞画 37.9×26.1

江戸時代の遊女の間では、二の腕に愛する男性の名を刺青することが流行しました。しかし、新しい男性が現れると、その刺青が邪魔になり、灸で焼き消したといわれています。絵は、包帯代わりに浅藍色の布で腕をしぼっている女性が描かれています。



### 企画展図録

### 「鍼のひびき 灸のぬくもり—癒しの歴史—」

今回の「くすり博物館だより」でご紹介した資料と、その他、鍼灸の歴史上貴重な書籍や絵図を多数掲載し、森ノ宮医療学園講師・長野仁先生に解説していただきました。

鍼灸に関心のある方、鍼灸を学ばれている方には、特に読みいただきたい図録です。 定価 1,100円

展示監修および執筆 長野仁先生 (1968～)

明治鍼灸大学大学院修士課程卒業後、明治鍼灸大学助手・非常勤講師をへて、1998年より鍼灸 鴻仁開業のかたわら2000年より森ノ宮医療学園専門学校非常勤講師・はりきゅうミュージアム研究員。2001年より北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部客員研究員。



## 薬草園から

### モグサはもえくさ～ヨモギ～

灸に使われる艾は「もえくさ（燃草）」がなまった言葉で、ヨモギ（蓬）とオオヨモギ（大蓬）の葉の裏側に生えている白い毛（毛茸）を集めたものです。

ヨモギはキク科の多年草で、道端から山野の草地に生えます。本州・四国・九州などに自生しており、産地としては滋賀県の伊吹山が有名です。春に若い葉を摘んで餅に入れるので「もちくさ（餅草）」とも呼ばれています。夏には1m前後に達し、秋に小さな花を多数つけます。葉は薬用で艾葉と呼ばれ、腹痛・吐瀉・止血に用いられます。民間では生葉をもんで切り傷につけたり、乾燥した葉を浴用にします。オオヨモギも地方によってはヨモギと同様に食用・薬用に利用されています。

江戸前期までは艾を作るのに、日かげで乾燥させて木臼で押しつぶし、両手でよく揉んで綿毛を集めたようです。現在では、夏に刈り取ってすぐに葉をしごきとり、2～4日、日光で自然乾燥させます。その後5～6時間、65～75℃で火力乾燥させて裁断機で細かくし、石臼でつきます。円筒形の“けんどん”というふるいで葉枝・葉脈などを落とし、更に唐箕という風力を使ったふるいで精製します。最高級品は、生のヨモギに対して0.5～0.6%の割合でしか取れません。

江戸時代には、日本からヨーロッパに灸治療が伝えられ、艾は西洋でそのまま moxa と呼ばれています。灸のほかには、印章用の朱肉や火打ち石から火をとる火口にも使われました。

ヨモギには精油成分としてシネオールが含まれており、艾を燃やすと独特の香が立ち上ります。灸をすえると気持ちが良いのは、温熱による刺激効果に加えて香りによる鎮静効果もあるからでしょう。

薬用植物園主任 白井英夫



## フォトコンテストご入賞おめでとうございます！



【最優秀賞】  
各務のぼる様・アケビ



【優秀賞】(左上より) 岩田 明様・涼として(トウゴマ)、中井弘男様・ノウゼンカズラ、堀 義子様・ジンジャー、志田英雄様・オトギリソウの輝き、富田良雄様・コバノガマスマ

【入選】 高瀬卓郎様・ガジュツ、渡辺昌昭様・彼岸花、上津福三様・ゲンノショウコ、葛西 隆様・カカオ、菊川益夫様・エゴノキ、水野文理様・アラビアコーヒーノキ 【佳作】 草刈俊彦様・ネコノヒゲ、下井吉男様・ウコンの花、足立 昭様・オニユリ、恩田辰朗様・ヘチマと博物館

### 薬草・薬木の四季

#### フォトコンテスト

前回のフォトコンテストは季節ごとにご応募いただきましたが、今回は1年を通じて撮影いただいた力作を25名の方からのべ104点お送りいただきました。多数のご応募ありがとうございました。

ここに入賞作品の一部をご紹介します。なお、入賞作品につきましては、今秋企画展終了後に、作品展を予定しておりますので、楽しみにお待ちください。

#### ◆植物画作品展 開催

2月26日(火)から3月23日(土)まで、植物画講座の受講生による作品展が開催されました。講師を含む26名の方の作品29点を展示しました。



#### ◆薬草園フェスタを開催します

昨年5月に2日間実施したフェスタにはボランティアの方も含めて、のべ2500名の方が参加されました。今年は4月28日(日)に、染め物・どんぐり工房・ハーブティーのコーナーなど楽しい催しものを行います。ぜひご来館ください。



昨年の薬草園フェスタの様子。皆さん楽しんでいるようですね。

#### ◆館長が薬事功労賞を受賞

平成13年度岐阜県健康関係知事表彰があり、館長の三宅康夫が薬事功労賞を受賞しました。製薬企業における医薬品開発と製造における業績、業界と学会における貢献、また最近の親しみやすい博物館を目指した館運営、さらには一般の方を対象とした薬についてのわかりやすい講演などが高く評価されたことによります。

#### ◆くすり博物館の大ホール(定員292名)では以下の催しを開催します。ふるってご参加ください。

### ハーブの講演会

日時：5月12日(日)13:30~15:00  
講師：影山むつみ先生(アトリエファブル代表・NHK文化センター講師ほか、多方面でご活躍のハーブ研究家)  
講演内容：「ハーブの効用と楽しみ方(仮題)」と題し、ハーブの魅力についてご紹介いただきます。  
[入場無料]



### 企画展記念

### 長野仁先生講演会

日時：6月23日(日)13:30~15:00  
講師：長野仁先生(鍼灸師・森ノ宮医療学園専門学校非常勤講師)  
講演内容：「鍼灸の歴史とツボ健康法」と題し、経絡や経穴(ツボ)についてのお話や、NHKテレビでもおなじみのツボ体操などのご紹介も予定しています。  
[入場無料]



#### くすり博物館HPがリニューアル

くすり博物館のホームページが一新され、「くすりの博物館」というタイトルのおもしろくて読みやすく、内容も豊富になりました。ぜひアクセスしてみてくださいね。  
<http://www.eisai.co.jp/museum/>

#### ◆大同薬室文庫付随資料が

搬入されました

大同薬室文庫の書籍はすでに整理済みで目録も完成しましたが、このたび同文庫の付随資料が多数搬入されました。現在ボランティアのご協力を得て、写真撮影や登録の作業など行われています。医薬関係のもの以外にも貴重な資料が多く含まれ、整理には時間がかかりそうです。

#### ◆薬草観察会を実施します

4~11月の第一日曜日10:00~11:00に薬用植物園で観察会を行います。薬草に関心のある方はどなたでもご参加できます。(予約・会費不要/雨天の場合は雨具要持参)

#### ◆◆資料・図書ご提供者ご芳名◆◆

大谷芳郎 奥田 潤 片桐平智  
河野 亨 小松良夫 佐藤倚男  
佐藤恵美子 中武成信 中野康夫  
堀岡正義 松崎 茂 宮崎 惇  
(敬称略/五十音順)

~ありがとうございました~

#### 内藤記念くすり博物館

開館/9:00~16:00  
休館/月曜日  
年末年始(12/28~1/8)

館長 三宅康夫  
学芸員 稲垣裕美(編集担当)  
学芸員・司書  
野尻佳与子・伊藤恭子  
庶務 森田麻起子  
小島敦子(見学受付)  
図書整理 林 知子  
薬用植物園  
主任・学芸員 白井英夫  
栽培管理 刈谷辰行 栗本裕康  
顧問 青木允夫  
アドバイザー 逸見誠三郎